

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 255

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 5081. 肉体を健全に発達させ、魂と霊性を育む機会を提供してくれるボルダリング
- 5082. 一生涯続けられる身体運動について
- 5083. 今朝方の夢
- 5084. 意識魂の願い: 今後の旅行計画
- 5085. 水の都ヴェネチア旅行に向けて
- 5086. サマータイム終了の前日を迎えて: 今朝方の夢
- 5087. 体に悪いものを口にしてしまう夢と呼吸を止める夢
- 5088. 今朝方の夢の続き
- 5089. 寂寞たる世界の中で
- 5090. 人知れず枯れていく木々や花々を想って
- 5091. ヴェネチア旅行の計画
- 5092. ヴェネチア旅行に向けて
- 5093. サマータイム終了の日に見た夢
- 5094. 今朝方の夢の続き
- 5095. ニッサン・インゲル先生のこと
- 5096. 聖なるもの(ヌミノーズ)を求めて
- 5097. 共感と感動の源泉: バラになろうとするバラ
- 5098. 世界との交感と交流: 今朝方の夢
- 5099. 深まりと終焉: 今後訪れたいEU諸国
- 5100. 成長の等高線

---

## 5081. 肉体を健全に発達させ、魂と霊性を育む機会を提供してくれるボルダリング

今日のボルダリング体験についてももう少し振り返っておきたい。少し前の私であれば、Youtube動画を撮影しながら、話し言葉で振り返りをしていたのだが、一時帰国を経て、話し言葉よりもやはり書き言葉を通じて振り返りを行う自分に再び戻ってきた。また日本語が話したくなかったときに動画を取ればいい。今は日本語を話す意欲がなく、話し言葉で何かを表現する意欲もあまりない。

今回のボルダリングが何回目だったのかももう忘れてしまっている。10回の回数券があと3回になると、ジムのスタッフから今日言われ、日本で4回ほどボルダリングジムに足を運んでいたから、ようやく10回を越したぐらいだろうか。

今日自分自身でも驚いたのは、これまであまり挑戦をしてこなかったパープルの課題のいくつかを順調にクリアしていったことだった。しかも中には、通称「オンサイト」と呼ばれる、他者が登っている姿を見ることなしに、初見でいきなり壁を登り切るということができる課題もあった。それには自分でも驚き、そして嬉しくなった。

3週間ほどフローニンゲンのジムから離れている間に、壁が様変わりしており、課題が大幅に入れ替わっていることに気づいた。それを見た時、とても新鮮に思えた。確かにこのように課題の入れ替えを定期的に行ってくれると、客としては飽きがこないため有り難い。課題の中には、このジムを代表する課題と言えるようなものもあり、それらはまだ残っていた。本日の後半に挑戦したパープルの課題はその一つであった。

今日は本当にパープルの課題ばかりを登っていたように思う。時折パープルよりも一つグレードが下の赤の課題を登っていたが、それらはほぼ一発で登れるか、少なくとも2回目には登れていた。やはりボルダリングも、「習うより慣れろ」の精神が大切のようであり、ジムに定期的に通い、壁を登っていればある程度のコツが比較的早く掴めてくるし、ボルダリングに必要な筋力も自然とついてくる。

コツに関してはようやく今回それが掴めてきたことを実感したが、筋力に関しては、日本に一時帰国する前あたりから気付いていた。意図的にかなり筋肉に負荷をかけるようなことをしていても、筋肉の回復が早くなり、何よりも筋肉痛が軽減されていることに気付いていたのである。

---

---

ボルダリングの最中の筋肉の持久力も付き始め、筋肉痛からの回復も早くなっていることを見ると、身体的な進歩と変化を実感する。ボルダリングは全身の様々な筋肉を複合的に活用するため、ボルダリングを長くやっている人たちの身体はやはり綺麗である。自分も随分としなやかな筋肉が付き始めているように感じる。

それともう一つ、ジムの中で楽しそうに壁を登る子供たちを見ていると、シュタイナーが述べていたことをふと思い出した。シュタイナーは、「肉体を健全に発達させていけば、その子供の中には必ず美しい魂と美しい霊性が人格として花を咲かせる」ということを述べていた。私はこの考え方に大いに共感する。

ボルダリングの持つ全身運動性を考えると、このスポーツは子供たちの体育にとっても有益なのではないかと思った。シュタイナー教育においては、確か人と競い合うようなスポーツを子供たちにさせることは控えており、そうしたスポーツはある程度年齢がいつてから行わせるということを知っている。その観点において、ボルダリングは基本的に自分と向き合うスポーツであり、同時に他者と意見交換しながら行うコミュニケーション型のスポーツであるため、シュタイナーの体育の発想に合わないものではない。

ボルダリングだけが候補になるわけではないが、子供たちが真に自らの肉体を健全に発達させていく機会が奪われている現代社会において、ボルダリングというスポーツは健全な肉体を育てていく機会を提供してくれるだろう。こうした体育に加えて、そもそも肉体を構成する栄養をいかに摂取するか、食育も合わせて考えていくことによって、子供たちの魂と霊性を育てていくことにつながるのではないと思う。そして、体育と食育の重要性は、私たち大人にも当てはまることである。フローニンゲン:2019/10/24(木) 19:35

## 5082. 一生涯続けられる身体運動について

時刻は午前6時を迎えようとしている。昨夜はボルダリングを楽しんだこともあり、普段より早めに終身した。おそらく9時半頃の就寝だったのではないと思う。別に疲れはなかったのだが、筋肉を十分に回復させたいという思いから早く寝た。そのおかげか、今朝は3時半過ぎに目覚めた。その時



---

にもう起きれるような心身の状態にあったのだが、なぜか私はそこで起きることをせず、もう一度目をつぶり、夢の世界の中に戻っていった。夢から覚めて目覚めると午前5時だった。

昨日の日記で書き留めていた通り、ボルダリングをするための身体が随分と構築されているためか、起床してみると、筋肉痛かほぼ全く無い状態であることに驚く。トレーニングを積んでいけば、本当に人間の体は変わるのである。それはヨガを通じても実感していることではあった。

ボルダリングは長くゆったりと続けて行きたいと思っているし、子供が出来たら子供たちと一緒にボルダリングをしたいということも考えている。昨日日記で言及したように、ボルダリングの持つ全身運動性は、体育にうってつけのものであるように感じられ、ボルダリングというスポーツの精神性は、シュタイナー教育で述べられているスポーツのあり方とも通じる。

そうした理由から子供たちと一緒にボルダリングを楽しみたいという思いがある一方で、自分は一体何歳までボルダリングを続けられるのかについてついつい考えが及んでしまう。想像するに、今と同じような生活習慣と適度な運動を続けていけば、60代は今と変わらない身体がそこにあるような気がしており、60代でもまだまだボルダリングができそうである。実際に、昨日も60代ぐらいと思われる「まだまだ若い」男性がボルダリングを楽しんでいた。私から見ると、60代後半というのは本当にまだまだ若く、そうした年齢であればボルダリングは十分に可能なのではないかと思う。

そのように考えると、70代や80代ぐらいまでならなんとかボルダリングを楽しめるだろうかという予感はあるが、それでもあと40年や50年そこらでボルダリングから離れる日がやってくることになる。そのようなことを考えながら、やはりボルダリング以外にも、一生継続けられる身体運動を今のうちから習慣にしておきたいという考えが芽生えた。

今私がボルダリング以外に行っていることは、毎朝のヨガと午後の軽いジョギングと散歩である。ジョギングに関しては本当に軽めに行っており、鼻で呼吸ができる程度のペースであり、尚且つ膝に負担がかからないような速度で走っている。これも長く続けられると思うが、100歳を超えてきた時には完全に散歩に切り替えた方が良いような気もしている。

ヨガに関しては、アーサナの数を増やし、強度を変えていけば、ボルダリングと同じように全身のありとあらゆる筋肉や細胞を鍛えることが可能であり、今後はそれを意識して行こうかと思う。ヨガであ

---

---

れば、本当に一生涯継続することができそうであり、時間や場所を選ばずに自宅で行えることもまた魅力である。晴れた日にはヨガマットを公園に持って行き、そこでヨガをするというのもさぞかし気持ちがいいだろう。そのようなことをぼんやりと考えていた。フローニンゲン:2019/10/25(金)06:08

### 5083. 今朝方の夢

心地良い闇と静けさに包まれながら、今朝方の夢について思い返している。夢の中で私は、同じ大学の同じ学部にも所属していた二人の女性友達と一緒に大学内で授業を受けていた。その授業は経営学に関するものはずだったが、なぜか教授が数学の入試問題を出してきた。数学は私の最も好きな科目であり、同時に英語と同じぐらいに得意な科目でもあった。そうしたこともあり、教授が主題した問題も楽しく、そして難なく解けるだろうと思っていた。

しかし、いざ問題を解き始めてみると、意外と難しいことに気付いた。右隣に座っている二人の友人たちの方をチラッと見ると、彼女たちはスラスラと問題を解いているようであった。二人が都内の有名女子校を卒業し、優秀なのは知ってはいたが、改めて二人の能力の高さを見たような気がした。その問題は別に一人で解くことを要求されていたわけではなかったもので、私は隣にいた友人に解法を尋ねた。特に、私がつまづいている箇所に関して教えてもらったところ、「なるほど次数下げの技術をそのように使うのか」と感心した。

二人の友人は性格も良く、勉強ができることを鼻にかけることも全くなく、一緒に勉強していて気持ちが良いというのは昔と変わらない。そのようなことを思っていると、教壇にいた教授が姿を変え、なんと中学校時代に個人塾でお世話になっていた友人の父がそこに立っていた。

先生は突然英語で話し始め、私の隣にいた友人を指名し、英語で質問をした。すぐに気付いたが、先生の英語は日本語英語であり、お世辞にも発音が美しいとは言えず、正直なところ少し痛々しさがあつた。痛々しさの感情は、別にそこで英語を話す必要はないのに英語を話し、しかもその英語が発音的にも内容的にも大したものではなかったことから生まれていた。

友人は質問に対して、事前に準備をしていたかのような回答をした。友人の英語もたどたどしく、日本語訛りが相当に強いものだった。それに対して先生は、「事前に準備していた回答を単に読み上げているだけだ」と英語で批判し、私の方に近寄ってきて、今度は私に質問した。それに対して私

---

は、流暢な英語で返答した。その前に、先生の英語が聞き取りずらかったため、その点についてまず指摘し、もう少しはっきりとクリアに英語を話してもらうように促した。すると先生は少々たじろいでおり、私が一気に述べた回答についてはほぼ理解していないように思われた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は小中学校時代を過ごした社宅の中にいた。社宅の食卓で、母と朝食を食べようとしているところだった。冷蔵庫を見ると、やたらと賞味期限が切れたものばかりが置かれており、朝食に食べれそうなものがなく、少々困っていたところ、母が冷蔵庫からボックスに入っていたデザートを取り出した。見ると中身は、綺麗なオレンジの皮が上に乗った白い饅頭だった。饅頭の中身はあんこか何かであり、それは濃いめのコーヒーに合うような食べ物だった。私は早速一つその饅頭を食べてみた。すると、それは非常に美味しく、自然ともう一つに手が伸びた。

私がゆっくりと味わいながら饅頭を食べていると、母は時間のことを心配しているようだった。どうやら私はこれから学校に行く必要があり、その時間が迫ってきているようだった。しかしそれは母の勘違いであり、自宅を午前8時半に出発すれば、十分に学校に間に合う旨を母に伝え、そこからもう一つ饅頭を食べた。そこで夢の場面が変わった。

最後の夢の場面は、記憶が断片的なものになってしまっている。学校のトイレトペーパーが質の良い特殊なものに変わったということを友人たちが喜んでいたのを覚えている。また、トイレの備品に使う乾電池も、今まで以上に長持ちのするものに変わったという話を聞いた。今朝方は、そうした一連の夢を見ていた。フローニンゲン:2019/10/25(金)06:32

#### 5084. 意識魂の願い:今後の旅行計画

時刻は正午を迎えた。今日のフローニンゲンは曇っており、先ほどごくわずか小雨が降った。それは本当に雨かわからないような微量であったが、窓ガラスにわずかばかり付着した雨滴によってその存在が明らかになった。

今日はこれまでのところ、7曲ほど曲を作った。今日はゆっくりと5時に起床したことを考えると、午前中に随分と作曲に集中できていたのだとわかる。ここからは少しばかり読書をし、その後に仮眠を取りたい。読書として読み進めて行こうと思うのは、美学者の今道友信先生が執筆した『美について考

---

えるために『実践美学とカノロジー』という書籍だ。それをゆっくりと読み進め、その後に仮眠を挟んで再び作曲に取りかかろと思う。

早朝にふと、人生の最後の最後の瞬間まで、人生の美しさへの讃歌を歌い、人への愛と世界への愛を音で表現し続けて行きたいと思った。本当に人生の最後の最後の瞬間までだ。シュタイナーの言葉を借りれば、こうした生き方を希求する衝動は、悟性魂ではなく、意識魂から生まれてきたものであることがわかる。それは理性的な頭を働かせて生まれてきた願いではなく、どこかより深層部分の魂から生まれてきた願いのように思えてくる。

明日からは早いもので再び週末を迎える。時の流れは一時帰国中と同じぐらい早く感じられる。気がつけば11月まであと少しである。明日と明後日を使い、11月の2週目に予定しているヴェネチア旅行の計画を詰めて行こう。今回のヴェネチア旅行は数日間と比較的短い。5泊6日ぐらいの旅行にしようかと考えている。

金曜日の朝に出発し、火曜日の夕方か水曜日の夕方にフローニンゲンに戻ってくるような旅になるだろうか。アムステルダムからヴェネチアまでは飛行機で1時間40分ぐらいの距離であるため、本当に近く感じられる。

ヴェネチアでは美術館をゆっくりと巡ったり、ヴェネチアの街並みをゆっくりと堪能したいと思う。ヴェネチア旅行についてぼんやりと思いを馳せていると、年明け後、2月か3月にベルギーのアントワープとブリュッセルに行く計画についても考えが及んだ。ベルギーに数日間滞在し、そこから南に下って、フランスのまだ訪れたことのない街に数日ほど滞在し、最後にミラノに立ち寄る計画を立てている。それもまたとっさに思いついたものである。

春を迎えたら、2年振りにポーランドに足を運び、今度はワルシャワではなく、ポーランドの京都と呼ばれるクラクフにぜひ足を運びたい。クラクフはワルシャワと異なり、第二次世界大戦の戦火から逃れ、今も中世の歴史的な街並みが美しく残っているとのことである。そうした旅をぼんやりと考えながら、プラハを訪れることや、北欧にオーロラを見に行きたいという思いが芽生えてくる。引き続きヨーロッパで長く生活をしていくのであるから、焦ることなく、運命の導きに応じる形で旅行を実現させて行こうと思う。フローニンゲン:2019/10/25(金) 12:24



---

## 5085. 水の都ヴェネチア旅行に向けて

時刻は午後の7時半を迎えた。今日も穏やかな金曜日であった。

夕方に近所の運河沿いにジョギング兼ウォーキングに出かけ、その足で近所のスーパーに立ち寄った。運河沿いの道の紅葉がとても綺麗であり、落ち葉の鮮やかな絨毯があちらこちらにあった。その絨毯の上を踏みしめながら、默想的な意識の中でぼんやりといくつかの考えが浮かんできた。

日本に3週間ほど滞在した一時帰国から戻ってきて1週間ほどが経った。そこでふと、自分の職業はもしかすると、日記家・作曲家かつ旅人になったのかもしれないと思った。それは本当に天職なのかもしれない。職業という括りにしてしまうとおかしな響きがあり、若干違和感もあるが、日記を書くこと、曲を作ること、旅をすることで人生が進行していく。今日はそんな思いからか、来月に予定していたヴェネチア旅行について少し思いを巡らせていた。

当初の予定では、明日あたりに旅の旅程を組み、ホテルと航空券の予約をしようと思っていたのだが、本日の午後に少し調べてみると、思いの外旅程を素早く組むことができ、ホテルと航空券の予約も完了させることができた。

アムステルダムからヴェネチアまでは様々な航空会社のフライトが運行しているが、一番ゆとりがあるのはKLMのフライトであり、アムステルダムを午後3時半に出発するフライトは人気があるようで、残席があと1席しかなく、すぐに予約をした。KLMはその他にも、午前10時のフライト、夜の8時ぐらゐのフライトもあるのだが、それらはいずれも早すぎるか遅すぎるかのどちらかである。KLM以外のフライトでは、もっと時間が早いものしかなかったり、イギリスやフランスに乗り継いでヴェネチアまで行くため、大変不便である。

そうしたことから、アムステルダムからヴェネチアまで一本で行けて、尚且つアムステルダムをゆっくり出発することができるフライトがあるのはKLMだけである。往復チケットの価格もお手頃であり、日本円にして3万円弱ほどであり、実家から東京まで新幹線のグリーン車に乗るのと変わらない(グリーン車の方が若干高いぐらいだ)。

---

航空券の次にホテルの予約をした。ヴェネチアは、思っていたほどにコンパクトな街であり、歩いて街を一周することも可能とのことであり、実際に地図を確認するとそうだった。ヴェネチアと言えば、なんと言っても街に張り巡らされている運河が有名であり、せつくなので運河を眺めることができるホテルに宿泊することにした。宿泊先のホテルは、空港から市内に直通のバス停から歩いて10分弱のところにある。近くにはオーガニック食品店もあり、とても便利だ。このホテルは、1400年代に作られた歴史あるホテルとのことである。最初ホテルの外観と内装を見た時に、とても煌びやかであることに驚いた。今ではもうリノベーションがされており、今から600年も前に作られた建物のようには思えないが、それでもどこか歴史の面影を残しているところが気に入った。

実は、ヴェネチアの中央駅付近にあるモダンなホテルを予約しようと思ったのだが、そこは昼夜とわず賑やかであり、騒音が気になる可能性があったのでそこに宿泊することをやめた。予約したホテルは、運河に面していて静かであり、周りの環境も大変落ち着いている。ホテルの部屋によっては運河を眺めることができるとのことであり、私が宿泊する部屋が仮に運河に面しているのであれば幸いだ。

ホテルに宿泊している際には、ぜひともヴェネチアの運河を眺めながら、あるいは運河を感じながら作曲を行いたい。せつくなので、今回の旅行には、イタリアの作曲家の楽譜を持って行こう。ちょうど日本に一時帰国している最中に、イタリア人の作曲家ニーノ・ロータの楽譜を購入し、彼の小作品集はすでに全ての曲を参考にして作曲をしている。そうしたこともあり、まだそれほど参考にしていないムツィオ・クレメンティの楽譜を一冊携えてヴェネチアに向かおうかと思う。

早いもので2週間後はまた旅行に出かけることになったが、自分の内側の促し、つまり内的必然性が自分を旅に導くのであれば、それに従うのは大切なことだろう。自分の内側の内的必然性が、今の自分では想像もしないような出会いをもたらしてくれ、自分をさらに遠くに運んでくれるのだから。

フローニンゲン:2019/10/25(金) 19:46

#### 5086. サマータイム終了の前日を迎えて:今朝方の夢

金曜日が終わり、今日から週末となった。昨日に引き続き、今朝もゆつたりと5時過ぎに起床した。5時に起床することが随分と遅く感じられる今日この頃である。日本に滞在中は、4時頃に起床してお

---

り、それは両親の起床リズムと同じであった。就寝時間が10時前であることを考えると、本当は4時ぐらいに起きることが理想であるが、目覚まし時計などを一切使わない私にとってみれば、自分の身体が目覚めた時を起床時間とするのが自然に適った生き方であろう。

明日からはいよいよ(ようやく?)、サマータイムが終了する。いつも時間がどちらに進められるのか迷ってしまいが、時間が1時間早くなると考えて間違い無いだろう。日没の時間から考えると、7時頃に沈んでいた夕日が6時頃に沈み、日の出の時間から考えると、7時半頃に現れていた朝日が6時半頃に現れるようになると考えていいだろうか。そうなると、サマータイムの終了は、やはり時間が1時間巻き戻されることになる。

いつもはそんなことを考えず、サマータイムが始まる時も終了する時も、勝手に合わせられるパソコンの時計に従って過ごしていたのだが、今回はふとサマータイムの終了について考えていた。明日の朝目覚める頃は時間がもう巻き戻っている。仮に今朝のように5時に起床したとすると、明日は4時に目覚めていることになる。サマータイムの終了に特に影響をされずに、明日からもまた自分なりのペースで生活を形作って行こうと思う。

静まり返った世界の中で、今朝方の夢について振り返っている。今朝はいくつもの夢を見ていた。夢の中で私は、日本のどこかのサッカーグラウンドで行われているサッカーの試合を観戦していた。それはプロの試合ではなく、高校生同士の試合であった。

左から右に攻めている方のチームの中に、高校時代の友人(HH)がいた。そのチームにはその他にも、高校のサッカー部のメンバーがいた。それを確認した時、左から右に攻めているのはうちの高校かと思った。試合には同学年のメンバーと一つ下の学年のメンバーが出場していた。私は特にフォワードを務めるその友人の動きを熱心に目で追っていた。彼はとにかくハードワークをし、守備も攻撃も、コートの中を縦横無尽に走り回っていた。

うちのチームが相手にカウンターを喰らった時、自陣まで戻ってカウンターを防いだのは彼だった。相手にスライディングをし、見事にボールを奪った彼は、そこから逆にカウンターを仕掛けた。一度中央のポジションを取っていた後輩にパスを出し、その後輩は再び彼にスルーパスの形でリターンパスを送った。彼は足が早かったので、そのスルーパスをもらうと一気に抜け出し、ゴールキーパー

---

との一対一を慌てることなく制し、冷静にボールをゴールに流し込んだ。その瞬間、彼を含め、チームは歓喜に沸いていた。ちょうどそこで試合終了のホイッスルが鳴ったので、私もゴール裏に駆け寄り、彼のゴールを祝い、そしてチームの勝利を祝した。すると、彼は喜びのあまり涙を流し始めた。それはとても清々しく、感動的な涙だった。

私も思わずもらい泣きしそうになった時、そう言えば、うちのチームに見慣れない選手がいたなと思った。その選手は10番を付けていたのだが、髪の毛が長く、うちにそのような選手はいたかなと不思議に思っていた。すると、その選手がサッカーグラウンドから離れようとしている時にその選手と目が合った。そこで気づいたのだが、結局彼はうちのチームのエースであり、実際に10番を背負っていた友人であった。

チームは勝利したのだが、その彼はどうも不機嫌な様子であり、私の顔を見ても挨拶をすることなく、何か独り言をぶつぶつと述べてその場を去ってしまった。その直後、小中学校時代から付き合いのある友人(YU)がやってきて、そのエースと私のトラップの仕方が似ており、時々二人を間違えてしまう、ということを書いてきた。

私から見ると、彼のトラップの仕方やボールコントロールは、一昔前の日本代表の10番の選手のプレーと似ていると思っており、彼のプレーと似ているのであれば、私のプレーはその元日本代表の選手のプレーと似ているということになるのかと、少しばかり嬉しい気持ちに包まれていた。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/10/26(土)06:19

#### 5087. 体に悪いものを口にしてしまう夢と呼吸を止める夢

つい今し方振り返っていた夢の続きが、外の闇の世界にぼんやりと浮かぶ街灯の光のように、おぼろげにその記憶が蘇ってくる。サッカー場を後にした私は、その試合に出場していた高校時代の友人(HH)と、小中高時代の友人(SI)と一緒にご飯を食べに行っていた。そこは庶民的なレストランであり、高校生でも利用できるようなレストランだった。

私はまだ自分で何も注文していなかったのだが、席に着くや否や、料理が出された。そこには肉が入ったスープがあり、肉類を一切食べないはずの私は、二人との話に熱中するあまり、思わず肉を口に入れてしまった。その瞬間にやはり違和感があり、肉を食べたことによって腸内環境が悪化し

---

---

てしまうという懸念が生まれた。一口肉を食べた時にそこでスープを飲むのを止めればよかったのだが、なぜか私はそれを止めることができず、せつかくのスープがもったいないと思った。

自分の腸内環境が崩れることは心配だったが、そこからも引き続きスープを飲んでいった。すると、そういえばこの食事の前に、友人たちと一緒にポテトチップスをつまんでいたことを思い出した。しかもそれは、スーパーによく売られている劣悪な油とジャガイモの屑を使ったポテトチップスであり、食に関する知識があれば、体に悪いことがすぐにわかるものであった。そのようなポテトチップスをなぜ自分をつまんでいたのだろうか。そのような疑問をスープを飲みながら考えている自分がいた。

この夢の場面について振り返ってみると、夢の中の自分が夢の中の時間をさらに遡って思考している点が興味深い。夢の中の自分も、今このようにして日記を書いている自分と同じように、時間感覚があり、過去に思考を及ぼせるようだった。

今回の夢の中では、それをかなり意識的に行なっている自分がいて、ポテトチップスを食べている自分を冷静に眺めており、その行為に対する明確な反省の意識がそこにあった。さて、この夢と同じような場面に遭遇したら、この私はどうするだろうか？間違っても一般的なスーパーで売られているようなポテトチップスを口にすることはないだろうが、スープを飲んでいる時に、そこに肉が入っていると知らずに口に入ってきた肉を吐き出すことはないかもしれないと考えていた。

そのままその肉を食べてしまうことは十分に考えられる。ただし、夢の中の自分とは異なり、そこからスープを飲み進めていくことはないだろう。肉類を食べないことによって腸内環境が良好なものとなり、その結果として身体の調子、さらには精神の働きまでもが良好になっているのであるから、肉の入ったスープはこの私であれば飲み進めないであろう、というような考えが今の私の中にある。

この夢とは別に、まだいくつかの夢を見ていた。夢の中で私は、学校の体育館ではなく、どこかの街の市民体育館にいた。その場所は日本のどこかにある。体育館の中には大勢の人がいたが、綺麗に列をなして、彼らは全員フロアに座っていた。私はある列の前の方に座っていた。すると、一人の係員らしき女性がやってきて、「今から何秒息を止めることができるかを測定します」と述べた。私は何のことかさっぱりわからなかったが、その場にいた全員は変てこな呼吸器を付けられており、タ



---

イムを測定する変な空気入れのようなものを手に握らされていた。私もその変てこな呼吸器を付け、空気入れのような測定器を左手で握った。

タイムの測定は二人1組で行われるとのことであり、私の後ろには誰か見知らぬ人がいて、その方がサポートしてくれるようだった。これまた係員と思われる別の女性か私の方に近づいてきて、彼女から呼吸器を受け取った瞬間に測定が始まった。

私は大きく息を吸い、息を止めた。生後数ヶ月で水泳を始め、そこから10年以上も水泳をやっていたことから、呼吸を止めるのには慣れており、2分近く息を止めることができるかと思っていたら、意外とすぐに苦しくなり、1分にも満たないのではと思われるところで、空気入れのような測定器を握りしめ、測定を終えた。タイムを見ると、一応1分は超えており、1分20秒という結果が表示されていた。私はそのタイムにあまり納得がいかなかったが、特に気にすることはないと開き直っていた。

すると、ちょうど右斜前に、小中学校時代の友人(TF)がいて、彼もタイムの測定をしていたようだった。斜め後ろから彼のタイムがちょうど見え、彼のタイムはなんと2分14秒だった。そこで私はふと、「進化の過程上、サルは人間よりも呼吸が長いのか」と思った。彼には失礼かもしれないが、彼の顔は—私の顔よりも—チンパンジーのようであり、チンパンジーのような彼なら2分を超えて息を止めても何ら不思議ではないと思った。そのような妙な納得感が芽生えたところで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/10/26(土)06:51

#### 5088. 今朝方の夢の続き

今朝は早朝から冷たい風が吹いている。起床してすぐに窓を開けた時に、冷たい風が部屋に流れ込んできた。

今、書斎の中で外の音に耳を傾けていると、葉のない街路樹の枝が風で揺れる音が聞こえてくる。フローニンゲンは最近随分と冷えてきており、来週には最低気温が2度まで下がる日が何日かある。2週間後に訪れるヴェネチアの気温を確認してみると、フローニンゲンよりも暖かいようではあるが、来週以降に関してはそれほど変わらない気温のようである。ヴェネチア旅行にしばし思いを巡らせながら、今朝方の夢の続きについて再度振り返っていた。

---

夢の中で私は、夢の中の世界を見る者としてそこにいた。名前のわからないある女性アナウンサーがボルダリングジムに取材に行く様子が映像としてそこにあり、私はその映像を眺めていた。厳密には、その映像を単に外から眺めるのではなく、映像そのものの中に入って、映像の世界の中で観察者としての自己がいたのである。その女性アナウンサーは、住宅地の中にあるボルダリングジムを訪れようとしていた。それはおそらく都内のどこかである。

ジムの近くに到着すると、その入り口がどこなのかすぐにはわからず、そのアナウンサーは少し困っていた。しかし、後ろから客らしき男性がやってきて、スッと階段の下に降りていく姿が見えて、階段の下にジムの受付があるのだと推測された。

女性アナウンサーは男性の後を追うようにして階段の下に降りていくと、そこには綺麗なボルダリングジムがあった。彼女はジムの入り口に入り、受付に行くのかと思いきや、真っ先に向かったのは、待合場所にある本棚だった。彼女はそこで、本棚の中に置かれている一冊の書籍を手にとった。本棚に置かれている書籍はどれもボルダリングや山登りに関するものなのだが、その一冊は数学の積分に関する書籍だった。何やら積分計算を使ってボルダリング技術の向上を目指すことを意図して書かれた書籍らしい。夢の世界を眺めている私は、興味本位で本棚のその他の書籍の背表紙を眺めていった。

すると、その他にもいくつか興味深い書籍があり、もう一冊印象に残っているのは、あるプログラミング言語を活用してボルダリング技術を高めることを意図して書かれた実践書だ。そのような書籍に意識が向かっていると、ジムのスタッフの男性が女性アナウンサーに声をかけ、「初めてジムに来られましたか？」と尋ねた。

その質問に対して彼女は、「はいそうです。でも今日はボルダリングをしに来たのではなく、ジムの様子を見せてもらうために来ました」と述べた。すると、そのスタッフの近くにいた小学生ぐらいの男の子がおやつを食べ始め、その男性スタッフは、「おやつは向こうの部屋で食べてね」と優しい言葉で注意をした。そこで夢の場面が変わった。

そこからは二つほど断片的な夢が続いた。二つのうちの一つの夢は、「ランドセル爆発事件」を報道したニュースに関するものだった。そのニュースによると、ある小学校低学年の子供が背負って

---

いたランドセルが学校内で突然爆発し、周りにいた10人ほどの子供たちが巻き添いを食らって死んでしまったという悲惨な事件だった。ニュースの解説によると、小さい子供ほど長く燃える性質があるらしく、それを狙っての犯行だったのではないかということだった。そのような解説を聞きながら、私はどこか違和感があり、この事件はある宗教団体によるものであり、爆死した子供はその団体に所属しており、洗脳か何かをかけられて、その子供が自発的に行なった事件のように思えたのである。ニュースを見ていたはずの私は、その学校に瞬間移動しており、亡くなった子供たちの位牌と写真が飾られた場所にいた。そこには何本かの蝋燭があり、蝋燭の火は静かに揺れていた。

その次の夢の場面では、剣士をモチーフにした少年漫画の主人公と彼の宿敵が戦っている場面に出くわした。二人の力は拮抗している分、両者の斬り合いは激しかった。お互いに斬り合い、両者随分と疲弊したところで、宿敵の方が漫画の主人公に対して、「なぜ内臓を狙ってこないのだ？」と尋ねた。すると主人公の方は、「それは自分の流儀ではない」と述べた。

宿敵の方は、絶えず相手を殺そうと考えているのに対し、主人公の方は、絶えず相手を生かしながら戦いに勝つということを考えているようだった。そこから激しい斬り合いが続き、戦いがいよいよクライマックスを迎える時に、最後の瞬間に主人公はやはり相手の足を切りにかかり、宿敵の方は相手の内臓に剣を突き刺しにかかった。二人が最後の斬り合いをした瞬間に雷が鳴り、結局どちらが勝ったのかわからないままに夢から覚めた。フローニンゲン:2019/10/26(土)07:45

#### 5089. 寂寞たる世界の中で

時刻は午後の2時を迎えようとしている。つい先ほど仮眠から目覚め、これから午後の活動に取り掛かる。今日も早いもので、もう折り返しの時間となった。ここからゆっくりと夕食まで創造活動や読書に従事し、夕方に外の空気を吸いに出かけようと思う。

今日は一日中曇りで天気は冴えず、さらには気温も低いが、毎日必ず外の空気を吸いに足を動かすことは継続させていく。身体は全ての活動の土台なのだから。

この寒空の下にあって、喜びの感情が芽生える。寂寥とした雰囲気の中にいることによって、特殊な感動が芽生える。

---

今日は午前中に、カカオドリンクを飲む幸せを味わっていた。カカオに含まれるアナンダミドは、本当に「幸福物質」と呼ばれるにふさわしい。もうしばらくしたら、午後にも一杯のカカオドリンクを味わおうと思う。そこでもまた幸福感に浸ることになるだろうか。

暗闇から朝に向かっていく時間帯に、深海のようなダークブルーの空の美しさに息を呑んだ。本当に深海にいるかのような静寂な空間に身を包まれ、その中で黙想的に日記を書いたり作曲をしたりしていた。

これから寒さが厳しくなり、暗い時間が長くなればなるほどに、自分の内的感覚がどのように変化するか楽しみである。それは毎年楽しみにしているものであり、一過性の変化を楽しんでいるのではなく、深まる自分の感覚を楽しみにしているのだ。

ある特殊な環境でしか育まれぬ特殊な感覚を研ぎ澄まし、それを深めていく。私がこの場所で生活をしているのは、この地でしか涵養し得ぬ感覚を深めていくためであり、深めた感覚を持ってしてこの世界に関与していくためなのだろう。

午前中にふと、人生の最後の最後まで、このような現代社会にあつていかに人間らしく生きれるのかに挑戦してみたいと思った。それは「挑戦」という言葉で表現して適切なのだろうか。もっとふさわしい言葉があるような気がする。そのように生きることは、おそらく自分の「役割」であり、「天命」なのだろう。絶えず美しいものを見て、絶えず幸福感を感じながら生きること。そうした最もシンプルな生き方を今後も貫いていく。自分はもう美と幸福感に貫かれてしまったのだから。それを示すかのように、午前中には突然に、幸福感の中にとろけてしまいそうな体験をした。この世界の中に自分が溶けていく感覚である。

美なるものの中に溶解していこう。毎日美を感じ、美を通じて日々を生きよう。

これからも引き続き、美しい画集や美しい楽譜をたくさん眺めよう。それらが顕現する美的世界に浸り切り、自分独自の美的世界を育んでいこう。その過程の中で言葉を紡ぎ出し、音を紡ぎ出していくことが、自分に課せられた役割なのだ。寂寞たる雰囲気醸し出す外の世界を眺めながら、そのようなことを考えていた。フローニンゲン:2019/10/26(土) 14:06

---

## 5090. 人知れず枯れていく木々や花々を想って

深まる秋に応じて、人知れず枯れていく木々や花々。新たな季節を迎えるにあたって、人知れず誕生する木々や花々。

儂さの持つ美と価値、そして尊さ。そのようなことを夕方の散歩の最中に思った。

今日もまた近くの運河沿いを散歩した。最初に軽くジョギングをし、その後散歩を楽しんだ。

散歩してから近所のスーパーに立ち寄ることはほぼ日課になっており、スーパーまでの運河沿いの道は、紅葉した落ち葉で美しく彩られていた。今日は誰かが落ち葉を掃除したのか、昨日まで歩道に敷き詰められていた落ち葉が片付いており、道の片隅に落ち葉の絨毯が広がっていた。落ち葉の絨毯と紅葉した木々を眺めていると、自然が生み出す絵画的な美しさに息を呑んだ。いや、自然の美はやはり絵画を超えてしまっているのだろうか。そのようなことを思う。

スーパーに立ち寄った後も雑多なことを考えていた。モネやルドンの絵画作品に思いを馳せている最中に、心眼あるいはそれを超えて魂眼を用いて把握した世界を絶対的な美として具現化させた画家には誰がいるだろうかと考えていた。西洋の画家において、それはすぐには思いつかなかったが、きっと誰かいるに違いない。

自宅の近くまで戻ってきた時、冒頭のような思いに駆られた。この深まりゆく秋に応じて、人知れず枯れていく木々や花々があることに気づき、それはなんとも儂い感情を抱かせた。だがそれは哀しみの混じった儂さではなく、どこか高貴さを身に纏う儂さであった。

私たち人間もまたそのような存在なのではないだろうか。私たちは人知れず働き、そして人知れずこの世での役割を終えていく。今この瞬間にも、この世界のどこかで新たな生命が誕生し、人知れず消えていく生命がある。生きとし生けるものは、そうした意味において平等なのかも知れない。自分もいつか、人知れず還る時がやってくるのだろう。その時を迎えるまで、人知れず自分の役割を全うしていこう。そのような気持ちを改めて持った。



---

深まる闇。時刻は午後の7時を迎え、もう辺りは真っ暗である。ちょうど今夜眠っている最中にサマータイムが終わる。明日起床した頃には、1時間早まった世界が存在している。欧米での生活も8年年目を迎え、サマータイムの始まりと終わりは特に目新しくはないのだが、いつもそれを不思議な感覚で迎える。宇宙から地球に帰還する際には、この不思議な感覚が増長させるとイメージしたらいいのだろうか。そうかも知れない。

今日はこれから一日を締め括る作曲実践を行う。その後、メンデルスゾーンの無言歌集の楽譜を目で追いながら曲を聴いていこうと思う。楽譜から音を聴き取り、そして音を読み取る力を身につけるために、楽譜を眺めながら意識的に曲を聴いていく。それをしばらく行ったら、今日もまた楽譜を眺めてから就寝しよう。音楽と絵画が夢の世界の中にも溢れ出してくれることを願う。フローニンゲン：  
2019/10/26(土) 19:10

#### 5091. ヴェネチア旅行の計画

今日からはいよいよサマータイムが終了し、幾分新たな気持ちで一日を始めることになった。今朝方起床した時間は午前4時半であり、サマータイムの時間で考えれば5時半の起床だったということだろうか。

昨夜就寝前に、サマータイムの終了を祝う花火が一発ほど上げられた。それは市が行う花火ではなく、誰か民間人が一発だけ上げたものであった。サマータイムの終了は、特段祝うほどのことでもなく、しかもその花火は突然上がったため、心臓に悪く感じられた。

今の時刻は午前5時を迎えたところであり、辺りは闇と静寂さに包まれている。これからは、それらに加えて、寒さも加わる。ここ最近はまだ毎日湯たんぽを使って就寝している。明後日の最低気温はなんと、1度まで下がるということであり、もう冬の様相を呈している。

2週間後の今頃は、私はもうヴェネチアにいる。2週間後の土曜日にフローニンゲンを出発し、今回は5泊6日の旅をすることになった。数日前の午後に、ふとヴェネチアについて調べ、思い立ったが吉日を体現するかのように、航空券やホテルの予約をすぐに済ませた。備忘録を兼ねて、旅程について簡単にまとめておこうと思う。

---

・11/9(土):フローニンゲンの自宅を午前10時頃に出発。アムステルダム国際空港に昼頃に到着し、Aspireラウンジで3時間弱ゆったりとくつろぎたいと思う。いつものように、このラウンジで作曲をしたり、日記を書いたりする。ちょうど時間が昼時なので、ここでサラダとスープを頂こうと思う。旅の楽しみの一つは、旅の最中にだけ飲むようにしているコーヒーを味わうことだ。このラウンジのエスプレッソはなかなか旨く、エスプレッソを相棒にして作曲や日記の執筆に励む。

フライトの時間は15:30であり、搭乗開始は15時ぐらいになるだろう。ヴェネチアのマルコポーロ空港(ヴェネツィア出身の旅行家であるマルコポーロにちなんで付けられた空港)には17:15に到着する。そこからシャトルバスで市内に向かい、途中で停車しないシャトルバスに乗れば、20分ほどで終着地点に到着し、そこからホテルまでは歩いて4分ほどなのでとても近い。ホテルには6時半過ぎには到着できそうだ。

この日は、ホテルの近くのオーガニック専門店に立ち寄り、そこで必要な食糧を購入したいと思う。ただし、そこはオーガニックスーパーではなさそうなので、果物や野菜が売られているかはわからず、ヴェネチアの中心部にあるオーガニックスーパーは、翌日の観光を終えた後に立ち寄る。

・11/10(日):この日は、小松美羽さんの作品が展示されているギャラリーに行く。このギャラリーは、ナポレオンが「世界一美しい広場」と称賛したと言われるサンマルコ広場にある建物の中で開催されている。ギャラリーは、毎日午前11時から午後6時まで開いているとのことなので、この日の朝はホテルでゆっくりとし、作曲実践を十分した後にホテルを出発しようと思う。

小松さんの作品を含め、ギャラリーで観賞を楽しんだ後には、音楽博物館(Arte Musica Venezia)に行く。ここは入場無料とのことであり、毎日午前10時から午後7時まで開いている。博物館を見学後、ミュージアムショップに立ち寄り、何か良い楽譜があればぜひ購入したい。

・11/11(月):この日は、モダンアートを多数展示している、ペギー・グッゲンハイム・コレクションという美術館に足を運ぶ。この美術館は、火曜日が休みであり、開館時間は午前10時から午後6時だ。アメリカ出身のペギー・グッゲンハイムという女性が現代美術の作品を数多く収集していたらしく、それらを展示しているとのことである。本人の自宅であった建物に、実際に交流のあったカルダー、ピカソ、ブラックらの作品が収められているとのことである。

---

・11/12(火):この日は、アカデミア美術館を訪れる。この美術館には休館日はなく、月曜日だけ開館時間が異なり、その他の日の開館時間は8:15から19:15とのことである。この美術館には、14世紀から18世紀にかけてのヴェネチア絵画を中心として、およそ2,000点の作品が所蔵されているとのことだ。ヴェネチア絵画は16世紀が黄金期と呼ばれており、その時代の作品がどのようなものであったかを見ることはとても楽しみである。

・11/13(水):この日は、カペーザロという美術館に行く。休館日は月曜日であり、開館時間は午前10時半から午後6時だ。19世紀から20世紀前半にかけてのイタリア人作家の作品に見るべきものが多いとのことである。その他にも、先日日本に一時帰国している時に何気なくクリムの画集を購入したのだが、この美術館ではクリムの『ユディトII(サロメ)』を鑑賞することができるそうだ。何か運命的なものを感じる。

・11/14(木):5泊6日のヴェネチア旅行を終える最終日。この日は、午前10時半までにホテルをチェックアウトし、昼の便でアムステルダムに戻る。マルコ・ポーロ空港を12:20に出発する飛行機に乗るため、空港には9時半ぐらいに到着し、帰りもラウンジでゆっくりしようと思う。

ざっと今回の旅程について書き留めてみたところ、美術館や博物館三昧の日々を送れそうで今から楽しみである。宿泊するホテルは、ホテルと言うよりも、1400年代に作られた邸宅を改修したものであり、家のようにくつろげるらしい。ヴェネチアの街でものんびりとしながら、それでいてこの街の良さを十分に味わいたいと思う。フローニンゲン:2019/10/27(日)05:49

## 5092. ヴェネチア旅行に向けて

時刻は午前6時を迎えようとしている。辺りは本当に静まり返っており、外の世界からな何も音が聞こえてこない。これまでであれば、小鳥たちの鳴き声が聞こえていたのだが、この寒さもあつてか彼らの鳴き声が聞こえてくることはない。小鳥たちの鳴き声を聞けるのは、日が昇る時間まで待たなければならない。

先ほど、再来週から始まるヴェネチア旅行の計画について簡単に書き留めていた。そもそも今回ヴェネチアに足を運ぼうと思ったのは、ヨーロッパの地で小松美羽さんの作品を見ることができると知ったからであり、また以前よりヴェネチアの街の存在がなんとなく気になっていたからである。

---

---

今回私は初めてイタリアに行く。これまでヨーロッパ諸国を巡ってきたのだが、イタリアには縁がなかった。小松さんの作品をきっかけとして、イタリア及びヴェネチアとの縁が結ばれたことを有り難く思う。

最初私は、ヴェネチアの街は随分と大きく、運河の移動は水上バスか水上タクシーを使わなければならないのかと思っていたが、どうやら運河には大抵橋がかかっており、橋を使って歩いて移動することが十分に可能とのことであった。ヴェネチアの街はそれほど大きくなく、街全体を歩いて移動できてしまうほどらしい。旅行中はとにかく歩くことを好む私にとってはとても有り難い。

宿泊先のホテルから主要な美術館までは本当に歩ける距離であり、オーガニックスーパーも歩いて10分ほどのところにある。ヴェネチアでの滞在も快適かつ、時間的・精神的なゆとりのあるものになるだろう。

ホテルの目と鼻の先にはオーガニックスーパーではないが、オーガニック専門店があり、それはオランダでいうところのHolland & Barrettのような店であり、そこでオーガニックの麦のフレークや豆乳を購入できるだろうか。仮にそれらが置いてなければ、やはりヴェネチアの街の中心部にあるオーガニックスーパーに立ち寄ろう。

ヴェネチアに到着するのは午後6時半頃であり、その日は夕食を摂らないか、摂ったとしても穀物クッキーぐらいにしようかと思う。それは事前にフローニンゲンの街の中心部にあるオーガニックスーパーで調達をしておこう。

こうした細々とした準備について書き留めていると、これからはなお一層のこと、世界中の美術館を巡りたいという思いが強くなった。本当は美しい美術作品が、世界のどこか一箇所に集まっていれば便利だが、逆にそれらがこの世界中に散らばっていることもまた意味があるのだろう。まずはヨーロッパの美術館を中心にヨーロッパ諸国の様々な美術館を巡り、そこで美しい美術作品と出会いたい。主要な美術館を巡る楽しみはもちろんあるが、小さな美術館を発掘する楽しみもある。そうした楽しみも大切にする。そしていつか、日本にもある素晴らしい美術館の数々を巡ってみたいものだ。フローニンゲン:2019/10/27(日)06:08

早朝の作曲実践を始める前に、今朝方の夢について振り返っておきたい。サマータイム終了に合わせて、今朝方もいくつかの夢を見ていた。夢の中で私は、ヨーロッパのある国の街に滞在していた。それは旅行というよりも、そこで生活をしているというような感覚があった。その街は中世の街並みを残しており、歴史を感じさせる古い建物がいくつもあった。そのうちの一つの建物に入ると、そこで二人の日本人と出会った。二人の関係は兄と妹のようであった。

建物の中の椅子に腰掛け、私たちは少しお喋りをしていた。兄は端正な顔立ちをしており、学業も優秀であり、尚且つスポーツの才能にも恵まれているようだった。そんな兄を妹は大変尊敬しているようであり、兄をベタ褒めするようなことを述べていた。だがそれは別に嫌味のある感じではなく、むしろ純粋に兄に敬意を評しているという意味で大変好感を持てた。

二人と話をした後、私たちはその場で別れた。そこから建物の外に出ると、偶然ながら、現在ある協働プロジェクトで一緒している方と遭遇した。その方と会話を楽しんでいる最中に、日本の歴史について尋ねられることがあった。仏教関係の質問であり、仏教に関する12個の用語、あるいは12種類の法具に関する質問だったと思うのだが、私はそれらの名前を全て答えることは不可能であった。それらの存在は知っていたが、それら一つ一つの名前までは覚えていなかったのである。

すると、その質問をした協働者の方は、ご自身がそれらの名前を全て記憶しているようであり、私はその方の記憶力に驚かされた。聞くところによると、二十歳の時に日本舞踊を習っていたそうであり、その時にそれらの用語を全て暗記してしまったとのことであった。好きで習った物事は、長く記憶に留まり続けるのだということを改めて思った。その方ともしばらく話をした後、ある現代風なビルの前に私はやってきた。そこに到着するや否や、自分が鬼ごっこに参加していることをハッと思い出した。

するとすぐさまビルから鬼役の人たちが現れ、私を捕まえようとし始めた。そこで私は宙に浮かび、空を飛んで逃げることにした。まずはビルの天辺に飛んでいき、悠長にもそこからの眺めを少し堪能することにした。すると、鬼役の人たちがビルの階段を使って天辺までやってきたので、彼らから逃げるために、ビルの壁をボルダリングをするかのように伝いながら下に降りていった。この時、私



---

は自分には空を飛べる能力があることを知っていたので、少々雑に壁を降りて行っても問題ないと思っていた。

壁を伝いながら天辺の方を見上げると、そこには鬼役の人たちが立ち往生している姿が見えた。地上に近づいてきた時に下を見ると、そこにはまた別の鬼役の人たちがいたので、結局私はそこからまた空を飛ぶことにした。しばらく空を飛んでいると、眼下に遊園地のようなアトラクションがあるのが見えた。さらには、メリーゴーランドの近くに小中学校時代の友人(SS)の姿が見えたので、彼に話しかけようと思って地上に降り立った。

すると彼は、私の方に近寄ってきて、どうしても空の飛び方を教えて欲しいとせがんできた。特に断る理由がなかった私は、彼に空の飛び方を教え始めた。だが、彼には空を飛ぶために必要なあることが決定的にかけていた。それは、自分は空を飛べるという絶対的な確信であり、もう一つは空を飛ぶ際の恐怖心に打ち勝つことであった。それら二つのことを教えるのは非常に難しく、それは技術云々の話ではなく、精神的な問題であった。彼にそれらのことを教えるために、私は少々荒い手段を採用することにした。

ちょうどその遊園地には高さの高いアトラクションがあり、そのアトラクションの天辺から地上に向かってジャンプすることを要求したのである。そうすると、絶体絶命な状況に置かれ、空を飛ばなければ命が助からない場面に遭遇することになるであろうから、彼が本来持っている空を飛べる力が発揮されるだろうと考えたのである。それは幾分荒い方法ではあったが、それしか手段は無いように思われた。まずは私が手本を示すことにし、地上ギリギリまで落下していき、地面にぶつかるか否かのところで私の体は宙に浮いた。その姿を見ていた友人は、感心と驚きの混じった表情を浮かべていた。フローニンゲン:2019/10/27(日)06:31

#### 5094. 今朝方の夢の続き

定点観測をするかのように、日記を書く時間帯を明記している自分がいる。時刻は午前6時半を迎えた。起床してから2時間ほどが経とうとしているが、今のところまだ日記の執筆しかしていない。もちろんその前に、オイルプリングやヨガの実践はしているのだが、書齋に到着してからはまだ日記を書くことしか行っていない状況だ。だがそれも何らおかしいことではなく、自分の内側から言葉が

---

生まれてくる衝動に従い、言葉が生み出される生命の流れがそこに存在し続けている限り、日記を綴り続けるというのは自分にとってのあるべき姿であると言える。作曲実践においても同じような形で取り組みを続けていく。

言葉と音の生命の流れを感じる。そしてそれを毎日育てていくこと。言葉と音を紡ぎ出すことによってそれを織りながらにして育てていくことが大切なのだ。

時計の針は進んでいるが、外の世界は相変わらず暗いままである。今ふと思ったが、ここには贅沢な闇と贅沢な静寂がある。それは贅沢なのだ。この贅沢を有り難く享受しよう。そんなことをふと思う。

先ほど今朝方の夢について二つに分けて書き留めていたが、そういえばその他にもまだ記憶に残っている夢があった。手元のメモ帳を見てみると、夢の断片が書き留められている。

夢の中で私は、友人に空の飛び方を教えた後、引き続きヨーロッパのある国の街の上を飛行していた。しばらく空を飛んでいると、レンガ造りの古びた建物があつた。近づくるとそれは立派な教会であつた。その教会は、どこかフローニンゲンを代表するマルティニ教会を思わせた。塔の最上階には展望台のようなものがあつた。

私はその展望台に立ち寄ることをせず、建物の天辺に着陸した後、すぐさま教会の中に入った。すると、ある一室の中で、不思議な競技が行われていた。古びた外観とは打って変わり、その部屋は綺麗なフローリングでできており、まるで新しい体育館のようであつた。フロアに多くの人が寝っ転がっており、今からヨガの「サランバサルヴァーンガーサナ(ショルダースタンドあるいは肩立ちのポーズとも呼ばれる)」のアーサナをしながら、フロアを滑っていく競技が行われるとのことであつた。

私は毎朝このアーサナを必ず行っているのだが、そのアーサナをしながら床を滑っていくことなど挑戦したことがなかった。好奇心と挑戦意欲があつた私は、それに挑戦してみようと思った。まずはいつものように両手で腰を支え、両足を天に向かって突き上げ、しばらくポーズをとった後に、足をゆっくりと戻して行った。足を戻していくその時に床を滑っていく仕組みになっているようであり、確かに私も前に進むことができた。

---

私はそこで、「なんだ水泳の足かきと手かきの要領か」とすぐさまコツを掴み、その他大勢の人よりも、圧倒的に速いタイムでゴール地点まで到着した。すると、隣にいた友人たちが、私の動きはもしかしたらルール違反かもしれないと指摘した。上げた足を地面に戻す力を使って前進するのは許容されているが、両手を地面につけたときの力を使って前進するのは許容されていないかもしれない、とのことだった。私はそのルールについて知らなかったので、友人たちと少し話し合い、正しいルールがなんなのかを模索していた。

すると、ゴール地点の付近にいたヨーロッパ人の係員らしき男性が、「お前らは正しいルールが何かを知らなければ何もできないのか」と述べた。それを聞いた時、それはもったもな指摘だと思った――実際には彼はさらに、「既存のルールの範囲内だと、お前が今滑ったやり方はルール違反であり、罰金6ユーロだ」とも述べていた――。

そこから私は、ルールすらも私たちが新たに作ってしまおうと友人に持ちかけた。端的には、既存のルールを打ち壊し、全く新しいルールでその競技を楽しもうと提案したのである。最初友人たちはキョトンとした表情を浮かべていたが、私が熱心に説得するものだから、最終的には私の提案に折れて、そこからは意見交換をしながら、新たなルールの策定を行っていった。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面も、どうやら舞台は同じであり、ヨーロッパのある国の街であった。レンガ作りの歴史ある建物の前に私は立っていて、その建物を外から眺めていた。見ると、外から建物の中が透けて見えており、中には巨大な恐竜のような怪物がいた。それは黒々とした色をしており、頭らへんが赤く輝いており、どうやら火を吹けるようだった。

一人の男性が空を飛んでその建物の天辺にやってきた。どうやら彼は、その怪物を退治しに来たらしかった。すぐさまその男性と怪物との戦いが始まったが、明らかに怪物の方が巨大な力を持っていた。どういうわけか、私は常に冷静な心を持っており、自分の力を貸せば、その怪物を難なく退治できるのではないかと思った。そこで私は、彼の方に向かって手をかざし、エネルギーを分け与える仕草をした。すると、見る見るうちに彼に巨大な力が備わってきて、それを見届けたところで私はもう大丈夫だろうと思い、その場を離れた。そこからは私も空を飛んで移動をした。

---

しばらく空を飛んでいると、地上にマクドナルドのような店があった。だがよくよく見ると、なぜか私の名前を文字で「カトナルド」という表示になっていた。面白そうだったので、私は地上に降り、その店に入ってみることにした。すると、どうやら私はこの店のオーナーのようであり、店の奥から店長とスタッフが私のところに挨拶にやってきた。

スタッフの若い男性は、私に契約書のような書類を手渡してくれた。細かい点なのだが、見ると印鑑の位置が少しおかしい場所に押されていた。その箇所を眺めていると、店長がそれに気付いたようであり、スタッフを店の裏に連れていき、突然理不尽に怒り始めた。私は別にそこまで怒るようなことでもないだろうと思っていたのだが、店長の叱責は止まず、スタッフの男性は小さく縮こまっており、いたたまれないような思いになってきた。私が店長を宥めようとする、「こうしたことはしっかりと教えないとダメです。決まりは決まりです」と店長は述べ、引き続きスタッフの若い男性に罵声を浴びせていた。フローニンゲン:2019/10/27(日)07:11

#### 5095. ニッサン・インゲル先生のこと

時刻は午後の7時を迎えた。静かで穏やかな日曜日が終わりに近づいている。

起床してからしばらくすると聞こえてきた小鳥のさえずり。それを今この時間帯に思い出す。明日もまた、小鳥たちの美しい鳴き声を聞きたい。

昨夜、自宅の壁にかけている二つの原画を眺めていた。それは、ニッサン・インゲル先生の作品である。インゲル先生は、コラージュ画の第一人者の一人として広く知られている。幸運にも私は、先生の原画を二枚ほど所蔵する機会に恵まれた。もう一枚、デジタル印刷された複製画があるのだが、それと比べると、原画が放つエネルギーは比べ物にならない。それは、写真に写っている人間と生身の人間ぐらい異なるエネルギーを発している。

昨夜は、生命力に溢れる二枚の原画をただじっと眺めていた。不思議なことに、毎回眺めるたびに新たな発見がある。美学者の今道友信先生も指摘していることではあるが、私たちの内面が成熟し、美的感覚が育まれれば育まれるだけ、絵画から汲み取れるものが深くなっていく。昨夜インゲル先生の作品をじっくりと眺めた私は、以前見た時よりも確かな変貌があったのかもしれない。

---

さらに昨夜は就寝前に、モネの画集を眺めていた。それは今から一年半前にロンドンのナショナルギャラリーで購入したものである。すると偶然ながら、インゲル先生はかつて、フランス・ノルマンディー地方にある古い邸宅をアトリエとして購入し、そこはかつてモネがアトリエを構えた地であったそうだ。

モネの画集を眺めた後、再度私はインゲル先生の作品を眺めた。インゲル先生のように、音楽的なコラージュ作品を作れないか。より具体的には、過去の様々な作曲家が残した楽譜から、自分が共鳴するメロディーやハーモニーを抜き出し、それらをアレンジしながらまるでコラージュを作るように組み合わせていく。そのような作曲方法について思いを馳せていた。

インゲル先生についてはまだ色々と思うことがある。私は2016年にオランダに渡る前の夏に、東京でインゲル先生に直接お会いする機会に恵まれた。その3ヶ月後に、先生はフランスの地で永眠された。それがただ一つの要因だとは言えないだろうが、日本への長旅が先生に疲労をもたらしてしまったのかもしれない。東京でお会いした時には澁刺とした印象を受けていただけに、その数ヶ月後にこの世を去ってしまったということが今でも信じられない。

先生がお亡くなりになるほんの少し前に、“Death and Rebirth in Peaceful Enlightenment (平穏な悟りにおける死と再生)”というコラージュ作品と一緒に作らせていただいた。私が作品の構想を練り、タイトルを決めさせていただいた。先生は私の構想に共鳴してくださるかのごとく、大変素晴らしい作品を作ってくださいました。

先生は生涯を閉じるどの瞬間まで作品を作り続けていたのか定かではないが、この作品は、先生がお亡くなりになられる前に作られた最後の作品の一つであることは確かだろう。私は先生が永眠された後の年末に日本に一時帰国し、その時にこの作品を受け取った。私はその時、先生がお亡くなりになられたことを知らなかった。先生がお亡くなりになられたのを知ったのは、もっとずっと後のことだった。

そのようなことを思い出しながら改めてこの作品を眺めてみると、作品の中に死の影が浮かんでいるように見え、一方で死を超越した穏やかな世界が顕現しているかのようだ。先生が自らの命を文字通り振り絞って作られた作品が今自分の目の前にある。それを思うと、自分の命が震えてくる。作



---

品の上部に貼られた天使の絵の断片が、どこか微笑んでいるように思える。フローニンゲン:2019/  
10/27(日)19:26

### 5096. 聖なるもの(ヌミノーゼ)を求めて

昨日同様に、今朝も午前4時半に起床した。このくらいの時間帯に起きるのが今の私にとってはちょうど良いようである。

昨夜も画集を眺めた後に就寝に向かった。夜8時を過ぎてくると、もう活字も頭に入らず、日記を執筆したり、作曲したりする集中力もないように感じられるため、このところは8時を過ぎてからはゆっくりと過ごすようにしている。とはいえ、ついつい9時頃までは読書をしてしまったりするのだが、それでも9時には切り上げるようにしている。

昨夜は9時まで、ルドルフ・オットーの『聖なるもの』という書籍を読んでいた。これは先日実家に戻った時に、父の本棚にあったものである。興味があったので手を伸ばして読んでみると、霊性や創造性に関して実に示唆に富む内容が書かれていたため、実家に滞在中も幾分書籍を読み進めていた。読み進めているうちに、これは父が購入したものなのか、それとも私が以前に購入して未読のまま父の本棚に入れておいたのか定かではない。いずれにせよ、何回も読み返したいような書籍であると直感的に気づいたので、本書をオランダに持って帰ることにしたのである。

オットーの言葉を用いれば、今の自分は、聖なるもの(ヌミノーゼ)を求めて、日々戦慄するような神秘に触れながら、魔神的な意志に基づいて創造活動に従事している、と言えるかもしれない。今日もそれが具現化された一日になるだろう。

たった今天気予報を確認したところ、大変驚いた。昨日の段階では、明日は最低気温が2度の予定だったのだが、なんとマイナス1度になるそうだ。さらに明後日の最低気温は0度である。明明後日からはまた少し最低気温が高くなり、寒さが和らぐが、明日は10月にしては異常な寒さである。ちょうど明日は、かかりつけの美容師のメルヴィンの店に行き、メルヴィンに髪を切ってもらう予定である。いつも多様な話題で盛り上がるのだが、明日はまずはこの異常な寒さについて話題になるに違いない。

---

フローニンゲンの天気予報を毎朝確認することは日課の一つだが、ここ最近はヴェネチアの天気も確認し、両者を比較している。その背景には、再来週にヴェネチアに旅行に出かけるからである。やはりヴェネチアはフローニンゲンよりも暖かいようだ。今回はヴェネチアでホテルと言うよりも、小さな宮殿のような場所に宿泊することにした。落ち着いた環境を求め、運河を眺められる条件を設けたら、その宿泊場所に行き着いた。

滞在先のスタッフから先日メールがあり、どうやらこの宿泊施設の中には受付がないらしく、鍵の受けた渡しが必要とのことであり—さらには直接会って歓待をしたいとのことであり—、空港に到着する時間を教えて欲しいと言われた。昨夜はそのメールに対して返信をしておいた。こうした宿泊場所に泊まるのはおそらく初めてであるから、今から楽しみである。特にこの宮殿は1400年代に建築されたものであるから、外装や内装、さらには部屋の中にあるであろう種々の飾りや芸術作品をじっくり観察したいと思う。真っ暗な早朝の世界を眺めながら、ヴェネチア旅行への期待感が少しずつ高まっていく。フローニンゲン:2019/10/28(月)05:31

#### 5097. 共感と感動の源泉:バラになろうとするバラ

昨夜は、敬愛するニッサン・インゲル先生の画集と小松美羽さんの画集を眺めながら就寝までの時間を過ごしていた。

一昨日に近所のスーパーに向かって歩いている時に考えていたことを再び思い出す。そこでは、心眼や魂眼を用いて美を表現していた人について思いを巡らせていた。

インゲル先生にせよ、小松さんにせよ、二人がそうした眼を持ってこの世界を捉え、眼には見えない世界を描き出している点に多大な共感を覚えるのかもしれない。しかも、そうした世界が単に描き出されているだけではなく、そこに固有の美があるからこそ、私は二人の作品に共鳴するのかもしれない。二人とも作風は全く異なるが、自分が抱いているこの共感の念と、二人の作品を美しいと思う心がどのように生まれているのかは今後の探究テーマになるだろう。

心眼や魂眼を用いて美を表現していた画家としては、その他にオディロン・ルドンなども挙げることができるだろうか。幸運にも、昨年夏にオランダのオッテルロー村にあるクレラー・ミュラー美術館にて、ルドンの企画展があり、そこでルドンの作品を数多く観た。そこでいくつかの作品を取り憑か

---

れたかのようにじっと眺めている自分がいたことを思い出す。その企画展に関する画集を美術館で求め、それを久しぶりに一昨日の夜に眺めていた。その前日はモネの画集であった。

モネの作品にも大変共感し、大きな感動をいつも与えてもらっているのだが、モネはどちらかと言うと肉体の眼を通じて、この実際の世界を描いていたように思える。そうであったとしても、やはり自分の内側には共感と感動がある。それらは上述の画家たちの作品がもたらす共感と感動と同質のものなのか異なるものなのかは定かではない。この辺りもまた自分なりに考えたいテーマである。

来週末に訪れるヴェネチアでは、どのような画家の作品と出会うだろうか。今からそれが楽しみである。きっと何かしらの出会いがそこにあるだろう。

ヴェネチアに到着した日はもう夕方のため、その日は宿泊場所の近場を散歩する程度に留める。その翌日からが実質上の観光のスタートであり、その日は小松美羽さんの作品が展示されているギャラリーに足を運び、その足で音楽博物館を訪れる。その翌日からは、毎日一つ美術館に足を運ぶ計画を立てている。

今回ヴェネチアを訪れることになったのもきっと何かの縁であり、何かからの働きかけなのだと思う。それは外側からの働きかけであると同時に、自分の内側からの働きかけだと感じている。そのようなことを考えていると、昨日ふと、「はじめからバラであった私はバラになる」というような言葉が自分の中から生まれてきた。その言葉が出てきたことは覚えているのだが、それがどのように生まれてきたのかはわからない。

一輪のバラとしての自分は、今後より一層バラになっていくだろう。これが意味することは難しくない。一輪のバラとしての自分は、究極的にバラになっていくことによって、バラ全体になっていく。それが人間の成熟過程だと言えるだろう。

シュタイナーは、「全ての成長は、生きたものが内部から外側に押し出されて死滅し、次第に外部の殻が剥げ落ちること」と述べている。内から外へ、そして外側での一旦の死滅を経て成長が起こるとするのは、体験的にもうなづける説明だ。そしてこれは、バラがバラになる過程を的確に説明してくれてもいる。縁と内外の働きかけにより、一輪のバラとしての自己は、今日もまたバラになろうと生命の運動を続けている。フローニンゲン:2019/10/28(月)05:51

時刻は午前6時を迎えようとしている。外の世界はまだまだ暗く、そしてまだまだ寒い。暗さと寒さに関しては、これからまだまだ深くなっていく。こうした暗さと寒さを待ち望んでいた自分がここにいる。冬の到来を嬉しく迎えようとしている自分がここにいる。こうした暗さと寒さがなければ、自分の内側の魔神的な意志が目覚めないのではないかとここ最近考える。その意志は、創造活動に不可欠のものであり、この世界の神秘や美を捉え、それらに対して畏怖の念を覚えるためにも必要なものである。

私の心はいつでもどこでも陽気に笑っている。この世界に開かれ、世界にただあるということを楽しんでいるようなのだ。こうした暗さと寒さに対して笑えるだろうか。笑えるのであれば、自己がこの世界にくつろぎ、この世界の中にただあることを楽しんでいるからなのだろう。そして何より、この世界に対して交感し、交流し合っていることの示唆になるだろう。

暗さと寒さに交感し、それらと交流する自己がここにいる。街灯の明かりしか見えない世界。無音という絶対音だけが鳴り響く世界。存在を濃縮してくれるほどの寒さに包まれた世界。そんな世界の中で私は毎日生きている。

今朝も筆が赴くままにつらつらと日記を書いている。これでいいのだと思う。

そろそろ早朝の作曲実践を始める前に、今朝方の夢について振り返っておこうかと思う。今朝方の夢はすでに断片的な記憶になってしまったが、一つ目の夢は、自分の中の破壊衝動のようなものが具現化されている夢だったように思う。そこには温和な自分と溢れんばかりの攻撃性を持った自分がいて、後者の力を発露させている自分がいた。夢の中でどのような人物が登場していたのかは定かではないが、それは友人ではなく、見知らぬ人たちだったように思う。

その中に一人の男性がいて、最初私はその人と何かについて穏やかに話をしていた。ところがあるところから突如として、自分の内側の攻撃性が芽生え、その男性がもはや立ち上がれないぐらいにまで暴行を加えていた。確か最初にその男性が私に肉体的な攻撃を仕掛けてきて、その攻撃があ

---

まりにも大したことがなかったため、「攻撃というのはこういうものを指すんです」と手本を示すかのよ  
うに、その男性を殴打したのだと思う。

夢の中で攻撃性が発露される時には、たいていの場合、正義心と親切心に基づいていることが多い。今回は、親切心に基づいた行動だったと言えるかもしれない。だが注意が必要なのは、そうした正義心や親切心の背後には、何か巨大でブヨブヨとした言葉にならない感情があるということである。今回もまた親切心の向こう側にあるそうした感情に基づいて、私はその男性を攻撃していたのだと思う。

そこで一度目が覚めた。目が覚めると午前2時頃であり、枕として用いている以外にクッション代りに使っている二つの枕に思いっきりエルボーを喰らわせている自分がいた。その動作は、夢の中で行っていたものと全く同じだった。

そこで一度トイレに行き、再度夢の世界に戻ってみると、今度は夢の中で、サッカー元日本代表の選手(HN)と以前会社に勤めていた時の女性の先輩の方と出会った。二人と遭遇したのは、実際に通っていた中学校のグラウンドに似た場所だった。私は、グラウンドで行われているサッカーの練習試合を観戦しており、ちょうど今から自分も試合に混ぜてもらおうかと思っていたところだった。ところが偶然にも、グラウンドを横切っていく一人の男性がいて、誰かと思いきや、その方だった。その方と私は知り合いのようであり、その方と偶然出会ったことを嬉しく思った私は、その方にすぐさま近づいていって挨拶をした。

自分の中の記憶では、先日お会いした時には二人で随分と話が盛り上がっていたのだが、この日はどうもその方のテンションが低いように思えた。逆に私はテンションがとても高かったようなので、その方は私の元気のいい挨拶を少々嫌がっているように思えた。その方に挨拶をした直後、後ろから声を掛けられ、振り向くと、前職時代の先輩の女性だった。そこからは、グラウンドの隅っこに張られたタープの下で行われる食事会に参加した。そこにはすでに5~6人の人がいて、全員がすぐにテーブルに着席し、そこからは楽しげな食事会が始まった。だが私は、サッカー元日本代表のその選手の方と改めて落ち着いて話がしたいと思い、食事会が始まった直後に、その方に再び声をかけに行った。フローニンゲン:2019/10/28(月)06:18



時刻は午後の7時を迎えようとしている。今日もまた一日がゆっくりと終わりに近づいていく。それは小さな一歩だが、確かな一歩だ。それは成熟に向かう一歩であり、人生の終焉に向かう一歩でもある。

何かが進んでいくというのは、裏を返せば、終焉に向かっていく過程だとも捉えることができるのではないだろうか。深まりと終わりは表裏一体の関係にあったのだ。

何かが進んでいくこと、そして自分自身が進んでいくことは、人生の終わりに向かっていくことでもあったのだ。それを悲壮がる必要は全くない。

進んだ自己を持ってして開ける終焉の扉の向こうには、きっとまた何かがある。そのような死生観らしきものが芽生えてくる。そうしたものを芽生えさせ、育ませるような外部環境がここにある。

辺りはもう真っ暗である。自宅の前の道路を走る車の音が聞こえてくる他には、街灯のぼんやりとした明かりだけが見える。

夕方買い物がてら近所の運河沿いをジョギングしている際に、飛行機が空に向かって飛び立っている姿を見た。私はまだ一度しか利用したことがないが、おそらくフローニンゲン空港から飛び立った飛行機だったのだと思う。飛行機が空に向かって上昇しているのを眺めていると、幾分不思議な恍惚的感情が芽生えた。天に向かっていく事物に対して芽生える独特な恍惚感だと言えるだろうか。飛行機が雲に隠れるまで私はそれを眺めていた。視線を下に下ろすと、運河の水面が夕日で輝いていた。そして道端の落ち葉もまた光り輝き、木漏れ日が優しく体を包んでくれていた。

またしてもとっさの思いつきなのだが、改めてEU諸国を調べてみた際に、まだ足を運んでいない国々に近々行ってみようと思った。それらをざっと列挙すると、ブルガリア、クロアチア、キプロス共和国、チェコ、エストニア、ギリシャ、アイルランド、ラトビア、リトアニア、ルクセンブルグ、マルタ共和国、ルーマニア、スロバキア、スロベニアだ。その他のEU諸国についてはすでに足を運んでいる。列挙した中でも、フローニンゲン大学でオランダ語のクラスを履修していた際に仲良くなった中国

---

人のシェンがお勧めしていたように、バルト三国のエストニア、ラトビア、リトアニアにはまず足を運んでみたい。

また、フローニンゲン大学の一年目にはルクセンブルグ人の友人もでき、彼の話をもとにすると、ルクセンブルクも面白そうな国だと思う。そういえば、オランダで生活を始めた最初の年か次の年に、夢の中で「リガ」という地名が出てきて、後々になってそれがラトビアの首都だということを知ったということがある。その夢については過去の日記で書き留めており、確か見知らぬ女性か友人の女性がその地名を出してきたのだと記憶している。

ラトビアの首都リガに何があるのだろうか。どのようなものがそこで私を待っているのだろうか。そのようなことをぼんやりと考えさせてくれる闇夜が目の前に広がっている。今夜もまたあとしばらくしたら、闇夜のように深い夢の世界の中に落ちていく。フローニンゲン:2019/10/28(月)19:09

#### 5100. 成長の等高線

—人は神を理解できないが、神を感じる—ルター

夜を迎えた今になって今朝方のことを振り返っている。こうした振り返りはあつて良い。むしろそうした振り返りを行える時間的なゆとりがあることは幸せであり、その日を振り返ることができることもまた幸せなことなのだ。

今日という帰ってこない一日の味を再度噛み締める。それは何度噛み締めても充実感の果汁が溢れてくる。本当に充実した日々というのはそういうものだろう。

今朝は午前6時過ぎに小鳥のさえずりが聞こえた。昨日の朝には、小鳥の鳴き声が聞こえないことを残念がっていたのだが、今日は小鳥たちのさえずりが聞こえ、その美しい音の流れにただただ身を委ねていた。白銀がかった旋律の流れがそこにあつたのである。それはもう、耳を傾けた瞬間に一瞬にして観想的な意識にいざなってくれた。いやひょっとすると、それは非二元の意識に持っていく力さえあつたと言えるかもしれない。外の空気を吸いに出かけた夕方にも小鳥の鳴き声がどこからともなく聞こえてきて、私はそれが聞こえた瞬間に立ち止まった。自分という存在がそこで立ち止まったのである。

---

理性を介さずして、感性を通じて深く内的にわかるということ。欧米での生活が始まって以降、そうした体験を頻繁にするようになった。とりわけ欧州にやってきてからはその頻度が増すばかりである。もしかすると、日々そうした体験が身に起こっているかのようにすら思う。

忘我状態から忽然と溢れ出す感動の波。今日もそうした波の中にいた。波の上にいるというよりも、波の中に入り込んで、波そのものと化していたように思える。心の中の呼び声がどこからともなく聞こえてくると、そこでハッと、私は波の上に浮上してくる。すると私は、心の中の呼び声に立ち上がるのと同時に、波の上にも立ち上がる。

夕方、自己の成熟の歩みが等高線を形作っているように知覚された。それは成長の等高線であり、中心から外へ外へと、そして逆に見れば内へ内へと広がっていた。

今自分はその等高線のどのあたりを歩いているのだろうか。外から内へ、内から外へと広がっていく内的等高線をぼんやりと眺めていると、中心点と自己のお互いの目が合う瞬間があった。それは究極的な自己一致なのかもしれない。

人知を超えたものがこの世界に絶えず遍満し、揺らめいている。そしてそれは絶えず自己の周りを包んでくれているかのように思える。私はそれが何なのかを理解することはまだできないが、それを感じることはできる。フローニンゲン:2019/10/28(月)19:21